

内外交差点

コンパクトな町と壮大な風景の間で タクシー世界一周記<南米編①>

成川 史華氏 (扇交通社長) 第3/12回

パナマからアルゼンチン南部の町エル・カラファテに飛んだ。目当ては氷河。ペリト・モレノ氷河は圧巻で、轟音とともに崩れ落ちる氷塊の迫力にしばし見入った。その後、The NORTH FACEとpatagoniaのブランドロゴにもなっている名峰・フィッツロイを目指したが、この区間でタクシーを見かけることは一度もなかった。町はどこも小さく、人口もインフラもミニマム。町内の移動は徒歩、町から町へは長距離バスが1日数本走っている程度である。ツアー観光客向けのハイエースは見かけたが、それ以上の交通需要はなさそうだ。こうした町々では、過剰な移動手段がなくても人の流れがうまく機能していた。町づくりそのものが、観光と生活を効率的に共存させているのだろう。移動の必要性が少ない分、タクシーが少なくても成り立つ。コンパクトシティの実践例のように感じた。

次に向かった町はバリローチェ。飛行機で数時間、料金は1万円程度。宿で出会った日本人旅行者は、同じ区間を24時間かけてバスで移動したという。わずか数時間の飛行機と長距離バスとの価格差がほとんどなかったことは衝撃的だった。飛行機が安いのか、バスが高いのか。旅費はほぼ同じでも、時間の使い方がまったく異なる。それでも成り立っているのは不思議だ。空港に着くと、自然発生的な「相乗りタクシー」の文化に触れた。同地では町が一つにまとまっているため、行き先が同じ旅行者同士で当然のごとくタクシーをシェアする。乗務員が強引に価格を釣り上げることもなかった。ヒッチハイクも日常的で、多くの旅行者が手を挙げて車を止めていたため、私も試しに何度かやってみた。乗せた側も報酬は求めず、お互いに交流を楽しみ、最後には「気をつけてね」と気づかってくれる。その信頼で成り立つ交通文化のおかげで楽しい旅の思い出が増えていった。

バリローチェからサンティアゴまでは、20時間バスに揺られた。2階建ての大型バスには広いシートが並び、発車して間もなくサンドイッチとリンゴが運ばれてきた。南米の長距離バスでは軽食が提供されるのが当たり前のようだ。日本の高速バスにはないサービスに感動したのを覚えている。こうした“移動中のもてなし”とし

て、夜行バスでディズニーに行く時に朝ご飯としておにぎりとお茶が配られたら、嬉しかっただろうなあ…なんて考えていた。これが10年前の南米でのサービスだと思うと、今でもスゴいなあと感心する。

大都市のサンティアゴから飛んだイースター島では、宿で知り合ったカナダ人とバギーを借りて島を一周。舗装のない道を走り、点在するモアイ像や製造工場跡を巡るうち、都会の喧騒の記憶は消え去り、時の流れが現代から過去へと、ゆっくりと戻っていくのを感じた。その後、ビニャ・デル・マール、バルパライソでストリートアートに触れ、北上してアタカマ砂漠で見た夜空は、言葉が失うほど美しかった。降り注ぐ無数の星。過去から現在、何人の旅人がこの地に立ったか。何もいらぬ。心も身体も溶け込む感覚。空を見上げるだけで心が満たされる経験は、生涯何度もあるものではないだろう。

そして、目的地の一つであるウユニ塩湖を目指して、サン・ペドロ・デ・アタカマからボリビア・ウユニ塩湖への片道ツアーに参加した。行程は2泊3日。国境を越え、標高4000メートルを超える砂漠地帯をひたすら走る。参加者はチリ人の若者5人組と私。言葉はほとんど通じなかったが、年齢が近かったことと、1人が英語を話せたことで、すぐに打ち解けた。最初の夜は水も風呂もない土壁の宿で、電気もw i - f i ももちろんない。持参した水で顔を洗い、歯を磨く。都市生活では到底想像できない世界観だが、乗務員さんの巧みなアテンドのおかげもあったのだろうか、不思議と苦ではなかった。

そしてついに、ウユニ塩湖へ。ツアーではすべての車が乗務員さんの私有で、彼らだけが道を知っており、日本では当然に会社が担うようなことまで含め、全ての責任を負っている。彼らの案内のもと彼らの車でしか塩湖へ入ることができない。目の前に広がる真っ白な地平。空と地面の境目が混ざり合うような天空の鏡の前に、一枚の絵の中に居るような感覚だった。

同じくらい感動したのは、道中で迎えた私の誕生日。仲間たちがドーナツを積み上げ、ライターで火を灯し、歌を歌って祝ってくれた。ケーキもプレゼントもない。けれど、そのさりげない優しさが心に残った。人との出会いと絶景、土壁の宿で迎えたあの夜の誕生日。私にとってウユニ塩湖は、そのすべてが重なる場所である。

さあ、いよいよ目的地・マチュピチュは目の前だ。

